

【ネットワークの活動報告】

会長： ネットワークに関する話を順次させていただきます。

私は、42年前に土佐町から大阪へ出まして、7年前に戻ってまいりましたが、こちらへ戻って来ることは、ある意味わかっていたので、大阪で森林ボランティアの活動をやって、助走というか試運転をしながら高知へ帰る準備をしていました。

戻ってきた時には、このような組織をつくろうという思いは全くありませんでしたが、帰ってきて、その翌年くらいから移住された方を少しずつ訪問して、組織がどうのこうのということではなく、普段の話の聞き役みたいなことをしながら、土佐町だけでなく、大川も大豊も回りました。そして、メンバーは4年前に大体71世帯だったのですが、現在100世帯ぐらいに広がりました。

移住された方の移住先の特徴は、吉野川沿いの地区に半分以上の方が住んでおられ、その理由は仕事や買物、保育園の関係です。

大豊町と大川村はIターンがほとんどで、土佐町や本山町みたいにかたまっておらず、バラバラと住んでおられます。

組織を作ることだけを急がずに中身のある組織にしたいという考えだったので、地道な活動を行って、シンポジウムなんかも先に開催して、2007年（平成19年）の12月にれいほく田舎暮らしネットワークの設立総会を開きました。

ネットワークの活動状況ですが、平成19年3月に「住んでみんかよ？嶺北に」として第1回のシンポジウムを開催しました。そして「継続は力なり」を合言葉に、毎年シンポジウムを開催しています。また、四万十町や和歌山県的那智勝浦町、山口県の阿武町といったところに視察に行っています。

地域活性化に果たしている役割としては、教育委員や青年団長、民生委員、部落長など、かなりの地域で移住された方が活躍しているようです。また、メディアに出たり、移住者が地域で新しいイベントを計画しているというの、いい影響を与えているのではないかと思います。

次に、課題についてですが、ひとつは住居です。視察に行った阿武町の担当者は、この人が頼みに行ったら貸してくれるという切り札を探すのが鍵だと言っていました。

課題の2番目は、町村毎のリーダーの育成。3番目は、町村の担当者との綿密な連絡です。

家と仕事と農地の問題は、市町村の担当者が、実際に捜している人やお世話をする人と一緒になって、嶺北で言ったら4町村の担当者が情報を共有してやっていかないとなかなか前には進まないのではないかと思います。

また、嶺北の受け入れ活動の方針については、嶺北自身をもっとアピールしていく必要があるのではないかと思います。

移住者の持てる力を発揮させるためには、年齢や性別によって異なった対応をし、

それまで都市部で培ってきた経験を生かせる部署を考えることが大事ではないでしょうか。

皆さんにお渡ししてある「れいほく田舎暮らしの10か条」からいくつか申し上げます。

まず、思いつきで移住をするのではなく、お試し期間を経てから来てくださいうことを最初に言うておく必要があると思います。

次に、候補地は数多く見て目を肥やした方がいいということ。一目惚れということもありますが、長続きをしません。

また、農家物件はあるようではありませんので、移住希望者には、まずは住み始めてからたっぷり情報を集め、そして考えればと言ってあげるのがいいのではないかと思います。

地域の各種行事は情報源になりますので、可能な限り参加をした方がいいと思います。最後に、嶺北定住の決め手は、結局、待ち受ける皆さんの温かい心だと思います。

知事： ネットワークの活動の中で、一番移住の促進に役立ったこと、若しくは移住された方のサポートにつながったことは何ですか。典型的なパターンがあれば教えてください。我々も是非参考にさせていただきたいと思います。

会長： やはり心が大切だと思います。相談される方と心が通じるようになれば、即解決とはいかなくても、かなり前進します。

知事： 移住を考えている方はどういう形で最初のコンタクトをとられるのでしょうか。移住を考えている方からネットワークに相談があるんですか。

会長： 役場から我々に相談があったり、メンバーの人が個人的に相談を受けたりといういろいろなパターンがあります。

知事： 実は今、ひとつの壁に突き当たっていることがありまして、住むところや農地の情報を提供させていただいて、移住につなげたいと考えており、できるだけたくさん情報を持っておきたいのですが、特に農地はなかなか情報を提供していただけない場合が多いんです。というのは、登録をしてしまうと、土地をいづれ取り上げられるのではないかと多くの方が思っておられ、大切な土地と家の情報を他人には教えられないということなんです。

データベースに農地などの情報を蓄積しようとしており、丁寧なやり方で紹介をさせていただくということで情報提供をお願いしているのですが、そんなことで情

報を集めるのに苦勞をしています。

そんなことですので、先程「心」と仰いましたが、やはり最後は信頼関係が一番大切なんだろうなと思いました。この人だったら、この人が紹介してくれるんだったら信頼してもかまわないと思っていただけることが一番大切なのだろうと思います。まさにネットワークの皆さんはそんな役割を果たしてこられたのだと思います。

会長： 田舎に住みたい方は、農家に住みたいという方が多くて、少々汚くてもいいから古い農家を貸してくれるところはないだろうかという思いを持っています。それを解決する1つの鍵は、その農家を貸しもらうためのキーマンは誰かということです。そここのところを詰められず、話が止まっているというところが問題ではないでしょうか。そこを解決しなかったら田舎の一軒家を借りることはなかなか無理です。私たちみたいな都市部からの移住者、役場の職員、土地の有力者、この三者がセットになってこまめに動くということが大切ではないかと思っています。

知事： ありがとうございます。やはり、まず人間関係をしっかり把握して、信頼関係を築くということがベースになるんですね。私たちの取り組みで言えば、そうしたネットワークを全県下でどれだけ張り巡らせていけるかが重要になってくるのだと思います。町村担当者との密な連絡体制、受け入れ側、移住をして来られる側両方に関わるリーダーの育成を各地域でどれだけお願いをしていけるのかということが1つのキーになるのかもしれない。

高知県内で移住が進んでいる地域が2つあると思っており、その1つがこの嶺北地域で、もう1つが黒潮町なんですが、共通しているのは、地元でしっかり受け入れていこう、さらに、入られた方をしっかり支えていこうというネットワークがあるということであり、そのことが非常に大きいのだなと思いました。